

「書く」力を

— 加悦谷高校生の場合 —

はじめに

「浦西」と呼ばれる定めなき北国日和の多い当加悦谷^{かえつこ}は、大江山の北麓、天の橋立へ口を開いた谷である。加悦谷高校生の大半は、この谷の中の国語生活者である。

また、当地は、家内工業を主とした機業地として繁栄している。このことが、かれらの国語生活、ひいては、生活一般のはしほしに少なからぬ影響を与えている。ひがな一日鳴りつゞく機音が、かれらに、散漫でねばりのない性格を与えている点は、いつも指摘される。

—

当地の生活語は、かれらが、「キヤードニベン」と、いくぶん卑下して自称するように、外来の者には、その拗音化の頻りなこと

が、印象深く耳に残る。この一特色のみを取りあげてみても、わたくしには、その柔らかな響きが、豊かな表現力の大きな支えになっているように思われる。それにもかゝわらず、かれらが卑下の気持ちを取り去れないでいるのは、政治的、経済的には密接なつながりを持つている京都市と、その生活語の多くの面で、大きな違いがあることを意識しているからだといわれる。

「ほんな事いうたって、困るだにヤーか。」この言葉について少し考えて見ようと思った。「ほんな」とは「そんな」の意味だが外に年よりは「ほねえな」とか、「そねえな」とかいう言葉使いをされる事がある。「いうたって」は、私達も日常使っている言葉で、「いったって」なんていうのは何だかはずかしいような気がするほど親しんでいる言葉である。「困るだにヤーか。」は決して美しい方言とはいえない。今ごろは「困ってしまう」なんていう言葉が若い人の間に普及されたりしているが、この方言がなくなったりはしないだろう。(二年女)(原文のまゝ。以下同じ。)

加藤 宏 文

右の例は、二年生のA子さんが、夏休みの課題にこたえて提出したカードの中の一枚である。かの女の、生活語に対する考え方の一端がよくうかゞえる文章である。かの女は、他のカードで、また、つぎのようにも言っている。

「せんんだら」は「しなかつたら」の意味だが、この言葉は、いやな気持はしない。日常親しんでいる言葉で、この土地にいるかぎりは使い通す言葉であらう。

また、同じ二年生のB子さんの場合は、つぎのとおりである。

頭にきちゃう（効果的な言葉として流行語の一つ「頭にきちゃう」を取り上げました。）

流行語は薄っぺらな感じがして上品な言葉ではないと言えはその通りかも知れない。でも流行語ほど複雑な若者の気持を巧みに表現出来る言葉はない。例えばその中の一つ「頭にくる」を考えて見ても、気分がすぐれない時、人に笑われた時、物事を失敗した時等何か原因して頭にカーッと血が上りそうになった時に、よりよい箇所^カに流行語を巧かせればその表現は生かされてくるにちがいない。もちろんお年よりは通用しない言葉でしょう。

A子さん、B子さんが取りあげた、生活語の中の表現は、かの女らにしてみれば、機会あるごとに、当地のことばで言えば、「品がわるい」と指摘される点でもある。二人は、それぞれに、「そうですか」とは言い切れないものをも感じて書きしるした。耳を傾けるべき点がありはしないだろうか。

ところが、たとえば、目下最も切実な問題として、かの女らには、就職試験時の「面接」の問題がある。模擬面接をし、戦術まで考えてでかけて行っても、その結果は、かなりの者が好ましくない

「評価」を与えられて帰って来る。かの女らの心に兆していた、A子さん、B子さんと同様の考え方は、「キヤードニベンコンプレックス」にすりかえられる。この「コンプレックス」は、ことのほか根強い。

同様のことは、毎日の教室の「場」でも、学習者たちとともに痛感し合ってきた事象でもある。自分たちの、かけがえのない生活語に対する内外からの有無を言わさぬ評価が、かれらに、自己の真実を表現し切ることを、悲しいことに躊躇させているように思われる。かれらに、その生活語の持つ豊かな表現力を自覚させることと、表現の「場」を考えさせることとの両立は、至難の業であらうか。

初めてかれらに接したとき、すんでのところで大変な誤解をしそうになったことがあった。かれらの、「場」を考えない生の表現は、社会人として巣立つまでには、やはり、何とかして誤解されないようでありたい。それはかれら自身の願いでもある。ところが、一言その点を指摘すると、かれらは、一様に黙ってしまう。せっかきもり上がってきた教室の雰囲気も、しらじらしいものになりさがつてしまう。それでも、端々に気をくばりながら発言するのは、数人にすぎない。そして、何かの拍子にその一人がつい口をすべらすと、どっと笑う声か、かれのせつかくの表現を飛散させてしまう。これが、教室の「場」での現実である。

二

このようなかれらとともに、ことをみつめ合ってきて、早くも

半年が過ぎた。その中で、かれらの生活の中に、つとめて拭がるように試みてきたのは、「書く」ことである。

「場」を考えて「正しく表現する」ためには、まずもって、自己の表現をふりかえてみつめる必要がある。それは、とりもなおさず「コンプレックス」の積極的な解消への、唯一の道であろう。それに、かれらは、「書く」ことによる表現では、少しも「口をすべらす」ことがない。機会あるごとに試みてきた短文の表現の中には、「コンプレックス」の種になるような表現は、皆無といってもよい。それでは、「話す」ことにおいては、あれほどの至難の業が、「書く」ことにおいては、何の抵抗も感じさせないかという、必ずしもそうではない。

問、いわゆる「キヤードニベン」が、「書く」ときに影響を与え
ると思いませんか。

右の問での調査結果は、つぎのとおりである。

〔表①〕

		男	女
ない		11	8
与え	よい	0	0
	半々	2	1
与える	わる	5	8
		7	5

(対象は2年2組)

これによってもわかるように、かなりの者が、わるい影響を与える、と答えている。それでいて、実際にかれらが書いた表現には、それが現われていない(少くとも語いの

面のみでは。右の回答でも、語いの面のみを考えている者が多い。)のは、やはり、かれらが、「書く」ことによって、抵抗をおしのけているにちがいない。かれらが、すでにつけてきた「書く」力なのである。

右の問に対する回答において、かれらは、つぎのように付記して

いる。(原文のまゝ。)

〔例一〕よく手紙を書くとき、いつも話している様に書こうとするたびに「キヤードニベン」が書けるのでよくこまる。(一年女)

〔例二〕どうしても普通の文に書けないことがたまにあるけれど、だいたいすうすうとひよろじゅん語で書ける。(一年女)

〔例三〕こちらの言葉を書いた方が自分の気持をよく表わせる場合もある。(一年男)

〔例四〕僕はあまりにも影響はない(但し書くときだけ)口に出してしゃべるときには多に影響あり。(一年男)

〔例五〕会話の時は方言でよいが、ふつうの時は、やはりしんきい(傍点筆者、「めんどうだ」の意)(一年女)

かれらとともに、おたがいの「書く」表現をみつめ合い、反省し合っていくときに、常に思ふことがある。この教室の「場」が持っている位置である。一体、かれらは、定められたカリキュラム外では、どんな「書く」生活の実態を持っているのだろうか。その比重のいかんによっては、おのずから、教室の「場」の持つ意義にも影響があらう。いくら、教室で「書く」ことの実践につとめても、それがその「場」かぎりのものであるのと、そうでないのとでは、「みつめ」方も「書く」力も異ってくるだろう。

問、国語の時間以外(他教科の時間、学校生活以外の時間)での「書く」生活について。この一週間をふりかえて、つぎの項目について答えてください。

右の問での調査結果は、つぎのとおりである。

〔表②〕

項目		回数							
		1	2	3	4	5	6	7	8
①	通信文	2 4	1 2	4 3	2	1 2	2		
②	指示・揭示文	4	2	1	1	1			
③	感想・随筆	1	1 1	2				1	
④	論説文	1							
⑤	記録文	1 1	1						
⑥	讀文	1	3	1				1 1	1
⑦	小説・脚本		1						
⑧	日記							5	10

(対象は2年2組，数字は上が男子，下が女子)

す「生活のそれとは、極めて対照的な状態を示すものといえよう。たとえは、最も頻度数の多い第一項にしたところで、男子の3.5、女子では3.7強が、この一週間中にぜんぜん経験しなかったことになる。さらに、実際には、各項目にまたがる同一人もかなり含まれているから、実際はさらに狭いものとなる。また、男子よりも女子の方が、比較的、日常生活の中の「書く」生活の比重が大きいことが注目される。特に第六項、第八項では、それが顕著である。

したがって、かれらには、自分から進んで「書き」しるしたり、

この大きな調査から推測できることは、かれらの、特に学校生活以外の「場」における「書く」ことの生活の持つ比重が、極めて小さい、という点である。「話

〔表③〕

科目	順位		
	1	2	3
数学	13 10	5 7	4 2
物理	3 7	6 9	2 2
歴史	4 4	1 1	2 10
英語	0 1	7 4	2 4
商業	1 0	0 0	0 0
簿記	0 0	0 0	1 0
家庭	0 0	0 0	0 2
保健	0 0	1 0	1 0
その他	0 0	2 1	4 0

(対象は2年2組，数字は上が男子，下が女子)

「生物」が圧倒的に多い。)

(学年による選択科目の相違により、大差がある。一年生ではもちろん、これらは、受動的な記録、あるいはメモにすぎないけれども、表②に見た現状の中では、これらの作業が、かれらの「書く」力に与える影響は無視できない。とりわけ、計算を主とした自然科学系統、および外国語が、その上位を占めていることは、論理的思考の方法はともかくとして、「書く」ことによる表現の面では、影響が大きい。

国語科の中の「書く」ことの学習は、こうして、かれらにとっては、とりわけ貴重な「場」となるのである。

創作したりする機会が、極めて少ないといえよう。それにひきかえ、かれらが、他教科の学習の中で「受動的に」「書く」ことの場合、無視できない比重を示している。それらの中のあるものは、かれらの「書く」力にかなりの影響を与えているであろう。

問、他教科の時間の中で、最もノートを多くとるものを、多い順に三つ記してください。

右の間での調査結果は、つぎのとおりである。

このような、「書く」生活の実態の中で、かれらが、自分自身の表現をみつめることは、なかなか容易な業ではなさそうである。そこで、おたがいの、あるいは第三者の表現をみつめてみて、一緒に考える作業へとはいってみる。教室の「場」において、失笑を買よりよな他人の表現が、なぜそうなのだろうか、それでは、どう表現し直せばそうでなくなるのか、というのを、いつも考え合う習慣をつけた。教室の小黒板の掲示文、校内放送の表現など、身近かな問題を皆で考え合うとき、かれらの発言が、意外に活発になることがある。自分を、なかなか他人の前に出そうとしないかれらも、こういう共同作業の中では、いろいろと考え、生まのまゝで発表してくれる。

この夏休みの課題は、一学期間の、このような習慣を、広く、一般の生活の中でも育てること、つまり、いつもことばをみつめる習慣をつけることに眼目をおき、つぎのようにした。(学年によって、多少目標を変えた。)

「日常生活の中で、読んだり聞いたりする国語表現には、さまざまなものがあります。それらの中で、これはどうも変だぞ、と思われる表現をできるだけ多く集めてきてください。」

注、はがき大のカード(紙質自由)の右半分にその表現を、左半分に、それについての説明を書け。

右の結果、九月に提出してくれたカードは「一枚でも」という期待に文字通りこたえてくれたものから、数十枚のものまで、いずれ

も、興味深いみつめ方を示してくれた。

(A)語いについて(原文のまゝ。以下同じ。)

〔例一〕酷暑にもめげずよくガンばってテープを切ったのであった。(ある人のスポーツマンに対するほめことば)

〔説明一〕「ガンばって」が「がんばる」という動詞の「ガン」だけを片かなにするのは変だと思ふ。強くいいたいから「ガン」を「ば」って「を」を片かなと平かなにわけてあるのでしょうか。強くいいたいのなら他にもっとよい表現のしかたがあると思ふ(「めげず」の意味を知らないので「負けず」の方がいいと思つていたが意味をしらべてみるとめげずの方がよくあてはまると思つた。(一年女)ごくさゝいな点ではあるが、かの女は、二つの点をみつめ、そして、そのうちの一つについては、「もっとよい表現」を考え、「しらべ」てみた。こうなれば、「みつめ」方も、確かなものへと向う。

〔例二〕天橋立海水浴場にて、貝掘りをしていた時、ある人いわく、「ああ今日は、大いにつま、った」と。

〔説明二〕「不審な点」しゃれていてユーモアのある表現であるが、日本語には、「つまらない」の反対語には「おもしろい」とか「楽しい」等、いろいろ表現の仕方がある。又、こういうのが流行しだすと奥にこまる。(一年男)

かれは、「しゃれていてユーモアのある」点をみつめるにとどまらず、他の表現をも考えてみ、さらには、「流行語」に対する、かれの一つの見識をも述べている。こゝでは、将来の国語表現にも思い及ぶ兆しがみえる。

〔例三〕「あの子はほんとに作文を出すのかしら。」「らしいよ」「説明三」らしいは付属語だから自立語の下について文節を構成す

る単語である。それで「らしい」が文の始めに来ることは出来な
いはずである。このような対話は文法上まちがっているが、話し
あつて二人には意味が通じる。(一年女)

〔例二〕の説明と比較してみると興味深い。かの女は、いわゆる「文
法」が、実際の生活語の中では生きてこない、疑った。「文法」
を、この点にまで結びつけて、かの女の「みつめ」方にかたよりが
こないよう、方向づけてやらねばならない。「文法」が生きたそれ
であるために。

〔例四〕竹野郡宇川地方(こゝに書いた物は、ある会話がなされて
いる中からではなくて、自分が想い出した中からの物である。
文の最後に用いられる語

一、シットルカイヤー(物事を知らない場合、物事をたずねる場
合に使う。)

一、水道で手をアラオーカー(自分が洗う場合、他人を誘う場合
に使う。)

一、ソクナコトシテミー、先生ニユータルドー

一、規則がカワツタワヤー
〔説明四〕これらから、自分が感じた事は、○で旺んだ語は、消略
されても意味になんら変化はない。また、このまゝであると、言
葉をきたないもの、下品なものとするが、その反面この地方独特
(?)の親しみ(親しみ)に通じてもいるようである。(二年男)

隣接し、加悦谷地方とも交渉のある地方の生活語をとらえての説
明である。こゝで、かれは、二つの意識を卒直に表現している。い
わゆる「キヤードニベン」に対するかれの考え方も、こういう点か
らはいっていけば、正しい認識へと向かうことができるのではない

か。他の地方の生活語の場合は、このように、「みつめ」やすい。
つぎの二人の説明と結びつけてみると、かれらの考え方がよくわか
る。

〔例五〕おおきに

〔説明五〕(ありがとう)この方言は標準語にもなく、表現力も豊
でやわらかみのあるすばらしい方言だと思ふ。(一年男)

〔例六〕「なんでやあなあ、それは？られんぼにして。かたづけな
あかんで。やっぱし、あんばいげにしといたら気持ええでなあ、
かたづけなれや。」

〔説明六〕最後の「かたづけなれや」は「かたづけなさい」よりや
わらかく親しみやすい感じをうける。言葉使いは方言まるだして
らんぼうだがいやな感じがせず自然にかたづけようという気持が
わいて来る。(一年男)

自分の生活語による表現に対して、「やわらか」さや「親しみや
す」さを感じているからである。どのように表現すれば、相手に
自己の真実を伝え切ることができるか、さらには、相手に少しも抵
抗感を与えずに動かすことができるか、という表現効果にまで思い
をいたしている。このような態度が、異なった「場」における異な
った表現の場合にも生きてくるようになれば、おのずから、コンプ
レックスも解消へと向かうのではないか。

(B)「主語・述語」について

〔例一〕二年前からの懸案のプールが天築丘に工事が始められまし
た。

〔説明一〕「プール」の述語がない。(一年男)

〔例二〕私の考えはみなさんに楽しい夏休みを過ごしてもらいたい

ということだけ考えています。

〔説明二〕「不審な点」主語に述語が応じていない。(一年男)
〔例三〕どんな本でも読めばよいと、ある人がいったけれどもぼくは、前川君も、本の中には悪い感化を与えるものもあるといつた。

〔説明三〕ぼくは、前川君もの表現のしかた。自分の意見を主張しかけておいて、ふと前川君のことを思い出したような表現である。(一年男)

〔例四〕私はあなたのように歌がうまうありません。

〔説明四〕この文には二つの意味がある。

①私はあなたと同じで歌がへただ。

②私はあなた程、歌がうまくない。

①の事が言いたい時

私はあなたのように、歌がうまうありません

②の事が言いたい時

私はあなたのように、歌がうまうありません。

(だから助詞を適当に入れないと誤解される。)(一年女)

これらの説明は、すべて、文中の「主語・述語」の関係を論理的に「みつめ」た結果の記録である。かれら自身が「書く」場合によく犯す同じ誤まりについては、なかなか気づかせにくい。これを、他人の表現について「みつめ」させると、このように、多くの「発見」がなされる。これが、ひいては、自分自身が「書く」ときの論理に、磨きを与えてくれるようでありたい。

特に、〔説明三〕にみられる「みつめ」方は、形式からさらに、表現者の心理にまでもくいる鋭さをもみせている。また〔説明四〕に

しても、実際に自分で表現を改めてみて、「助詞」の用い方一つをも、おろそかにできないという、一般化した理解がなされている。

このような態度が「書く」ときにまで拡がるようでありたい。

(C)語の位置・呼応について

〔例一〕ふみきを必ず渡る時は一旦停車してほしい。

〔説明一〕必ずを入れる場所がおかしい。この文での必ずは渡る時を修飾している。しかしほんとに言いたいのは必ず一旦停車してほしいというのであるから

ふみきを渡る時は必ず一旦停車してほしい

と言わなければならない。(一年女)

〔例二〕大いに議論した結果、ことを豊かにし、さまざまな知識を身につけるといふ点ではいろいろの本を読むことが有益だが、そのためにわざわざ悪い感化を与える本を読む必要はない。

〔説明二〕「大いに議論した結果」の結果を受ける言葉がない。

「必要はない」にまですると照応しなくなる。又、文が長いことがいけない。(一年男)

右の二人の説明では、副詞の位置、書き出しと文末との一貫性が指摘されている。主語と述語との関係が論理的に考えられた上で、これらの諸点がしつかりと「みつめ」られると、生き生きとした表現へ一歩近づくことができる。そのためには〔説明二〕に述べられているように、「文の長いことがいけない」という点に気づくとよい。

(D)内容の矛盾について

〔例一〕反省として、試合には必ず出場することを基本として、一年生を主体とした練習法に切りかえ夏休みは日を欠かさずに練習を行ない、その期待にそうよう努力する。(第36号加悦高新聞)

〔説明一〕このように文を書いたら、反省ではなしに、希望のかたちになっている。(一年男)

〔例二〕チョット個性が強すぎて、チョットおネダンが高かったのなどで良すぎたばかりに手もとに残った高級品を問屋さんの協力を得て破格も破格半額にて提供ノ

〔説明二〕①二行目の「良すぎたばかりに」の主語は「品が」と思うが書いてないのでわかりにくい。②ネダンが高かったというのはともかくとして、個性が強すぎたということは品が良すぎるとはかぎらない。③三行目の破格半額で十分わかるのに破格をだぶる必要ない。(一年男)

右の二人の説明のように、他人の表現の論理の矛盾を「みつめ」ることは、社会生活の中では、極めて必要なことであろう。マスキの波に、いやというほど洗われつづけているかれらには、表現からはいって、その矛盾をみぬく力が備わるようでありたい。

④文章構成について

〔例一〕中ざらを出してどんなふうに盛りつけようかと思つてまごしていると母が「まあ、お前の好きなようにしなさい。」というので、かぼちゃが好物なぼくたちにはかぼちゃを多く、父と母にはナスを多くつけた。(弟の作文より)

〔説明一〕この文はあまり長くて意味がわかりにくい。(次のようにしたい)。中ざらを出してどんなふうに盛りつけようかと思つてまごまごしてしまつた。すると母が、「まあ、お前の好きなようにしなさい。」という。そこでかぼちゃが好きならば、かぼちゃを多く盛りつけ父と母にはなすを多くつけた。(一年女)

適切な語いを選ぶこと、主・述の関係を考えること、語の位置・

呼応をはっきりさせること、内容の矛盾をみぬくこと、これらの諸点を「みつめ」てきたかれらが、文章構成の点にまでみつめ及んでいることは、たのもしい。かれらが、実際に「書く」際にも、この「みつめ」方の深さが、一人一人にくまなくいきわたるようでありたい。その下地は、この課題をとおしての作業の中で芽生えてきていると信じた。右の〔説明一〕のような「みつめ」方は、とりもなおさず、自己の表現を推敲することにも通じてくるし、「コンプレックス」の克服にまで通じていく。

四

「国語のテストは、わかっている、どう書いてよいのかわからない。いつも、あとでなんだと思う。」とか、「国語のテストは、何とか書いておけば点がとれるものだ。」などと考えている学習者があつた。前者といえども、もちろん、「わかっている」ではなかったのだが、そういう印象を与えてきたとしたら、大いに反省しなければならぬ。この半年間、ことあるごとに、身につくように努力してきた「論理的な説解作業」などが、かれには、何のプラスにもなっていないことになるからである。

「わからない」とか、「何とか」という考え方が、もし一般的であるとするれば、「わかり」「この点を」と考えるようにするところに、「書く」ことの、実践上の眼目がある。「何を」「どう」書けば、相手によりよく理解されるか。「場」を考え、自己の表現を「みつめる」ことを、自分が「書く」ことの中にもつねに取り入れる習慣をつけたいものである。そのためには、夏休みの課題によつ

て、いくぶんかでも身につけたこの習慣を、こゝまで払げるような訓練が必要であろう。

〔例一〕私は毎年夏休みに塩のにおう海の近くに行くのですが、いつも汽船で行くのですが、汽船からみる山は、又、かわってとても景色がよいです。私は汽船ののっていたらいつも、車内を回るので、機かいの見える所はなんだかこわくて、頭がいたいようです、それでもなんとなしに回ってみたいのです。(後略) (原文のまゝ) (二年女「海」)

右のような文章は、極端な例ではあるが、多かれ少なかれ、どの作品にも見られる問題を含んでいる。ちなみに、一学期間かゝって、句読点や段落を意識した者は、約1/3にすぎない。くり返し「訓練」することが必要である。

機会あるごとにくり返してきた、小作文による「訓練」の中から、その一つを取り上げてみよう。(二年生のあるクラス)

1段「雨」2段「大江山」3段「高校生活」4段(自由な結び)〔課題〕右の四つの中心語を使って、四つの段落(一段が三文くらい)からなる文章を作ってください。(半紙1/4大の用紙、所要十五分、六時限目、二階の窓から雨がかりの大江山が見える。)

〔例一〕畜生ノ雨か。せっかく待ち望んだこの日であるのに。

今日こそは大江山へ登ろうと思ったけれども、やっぱりだめであつた。

後一年半の短い高校生活の思い出としてせひ登りたかつた。

畜生ノ又雨か、……(男)

右の例では、冒頭及び結び、「せっかく」「今日こそは」「せ

ひ」の語句などが、荒っぽい表現の中にも、一貫した気持ちを出している。与えられたわくの中で細工をしすぎると、一貫性が薄くなって、取ってつけたようになりがちだが、かれの文章にはそれが無い。

〔例二〕雨は普通、だれでもいやがるだろう。というのは、雨の日は何となくえ体の知れぬ隠気なものが漂っている。だから僕もいやだ。

しかし二学期最後の行事、大江山への遠足がある。三年生にとっては高校生活最後の行事故、最高に楽しんでもらいたい。しかし僕は大江山へ行くのはあまり好まない。

だから雨が降って遠足とりやめになったらと……。 (男)

この文章については、のちに、同じクラスの全員で検討し合ってみる機会を得た。

そこでは、まず、文相互間をつなぐ語が、頻繁に用いられていることが指摘された。文章の筋道を明確にするためには、そういう語を用いるべきことは、読解作業とおして、誰もが知っている。それでいて、実践はむずかしい。右の例は、一見、すっきりとした形式をみせているが、皆が指摘したように、「つなぎの語」が、ほとんど生きてはいない。矛盾さえもある。

このように、形式ばかりにとらわれると、とんでもないことになるものだ、ということになった。つねに注意しなければならぬ。

〔例三〕今年雨の少ない年だ。

「きつと秋になったらよく降るだろう。」

と、いつも父が言っていた。田畑の野菜もよく日にやけて、しおれてしまったそうだ。

大江山が色づいて、取入れが始まる季節になった。父が言った通り雨がよく降る。

「こんなに降ったら雪がたまるようになっても取り入れ出けへんわ」と母もよく言う。

それから又一年に二度の高校生活を楽しくする遠足が近づいている。それも雨天に左右される事である。

どうしてこんなに雨はいらん時に降るのだろう。雨を左右する事が出来ればいいのに。(女)

説点を一二補えば、細かいところまで気のくぼられた文章といえる。父と母のことばの引用も巧みに生かされている。段落は、時間の流れに沿って、回想時点より現在へとたぐりよせる形式だ。最後の一段もきいている。

このように、与えられた語句を中心に、段落をどう進めるかという作業は、時として、無理な結びつけを結果する。しかし、反面、それなりに、形式的な段落を意識することによって、考え方に体系をつける方向への導きにはプラスになったようである。

ともあれ、このような作業が、ともすれば学習者に嫌われがちな現状にあつて、どうすればかれらを引きつけることができるか。要は、どんなに時間をかけても、一人一人の作品をていねいに添削し、はげましつづけるという、こちら側の努力だと思ふ。

「浦西」の空の下、毎日大江山を眺めては、自分の「力」を思ふ。みつめるべきは、拙稿である。

(一九六二・一〇・二八)

(京都府立加悦谷高等学校教諭)